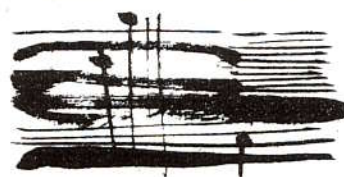


展 望



山元 眞

生きた対話

問うことから始めれば展望が開けてくる。問うてみて、返ってくる答えを見たり聴いたりすると新しいことに気づかされる。問わなければ答えがないし、答えがないと何をしたいか分からなくなる。つまり、生きた対話から展望、希望が生まれてくる。

ほとんどの教会には、教会委員会や運営委員会といった組織がある。これは、よく「諮問機関」といわれたりするが、それは正しい。宣教師、牧評議会も司祭評議会も教区顧問会も、いつてみれば「諮問機関」である。ときとして組織は冷たく感じる

ものだが、これらの機関は愛に基づく対話の機会であり、小教区の責任者である司祭も、教区の責任者である司教も、この愛に基づいた温かい対話がなければ司牧、宣教はできない。教会において、最終的な決定をし、責任をとるのは、司教、司祭であるが、より正しい決定をし、責任をとるために対話を欠かすことはできない。教会は神によって呼び集められた人から成る民であり、この民は相互の対話

によって温かい交流をもつものとなる。

対話がなければ、教会は冷たい独裁者に導かれることになる。

愛が最優先

あるとき、教会委員会で次のような発言があった。九時から始まる主日のミサにいつも走ってくる高齢者の夫婦がいる。バス停から教会まで走らなければミサの開始に間に合わない。ミサの開始を少し遅らせることができないだろうか、という意見

である。長い時間討議することもなく、委員の全員がミサを九時五分から始めることを求めた。

ある中学生が高齢者や身体的に障がいのある人のためにトイレを改造しなければ、このような方は教会に來たことも来ることができない、と言った。この意見を受けて委員会で話し合いが行われた。さまざまな意見が出た。予算がない。来られないのは仕方がない。我慢してもらおうし

「問うこと・聴くこと」

かない。障がい者用のトイレを作るにしても、一世帯あたりの出費の負担が大きすぎる。ある方が意見を述べた。本当に必要なことであれば、そしてそれが愛に基づくものであれば、是が非でも実行しなければいけない。みんながそのことを理解すればお金は何とかなる。リストラされたばかりのその人の意見に他の委員も賛同した。こうして始まった「トイレ献金」は割り当てではなく、無記

名の自由献金で行われ、三カ月で三百万円が集まった。もちろん、子どもたちも協力した。

結婚を機に教会を訪れた青年が話してくれた。自分は中学生の時からずっと教会に來ていない。それには理由がある。教会建設の話が持ち上がり、その資金集めの方法として各世帯に一定の献金が割り当てられた。おかしいと思った。教会にはいるんな人がいる。全額払えない人も

いるのに、そのようにこともよく考えずに、一律で割り当てるのはおかしい。教会は弱い人、貧しい人を大切にすることは言っていることとすることが違ふと思った。それから教会に來る気がしなくなった。

もっと信頼を

小教区においては、昔は主任司祭が一人で悩み、考えていろいろなことを決めていた。それで、うまくいっていたところもあったと思う。が

今、この複雑な時代にあつて、一人ひとりが福音の価値観をもって生きることが困難になっている。司祭も司教も、もはや一人でふさわしく判断し、決定することはできないと言っているのではない。幸いなことに、教会は先のような機関を設け、愛に基づく対話の中で、民として一丸となつてこの世界に神の愛の国を建設することを望んでいる。この教会のころを理解し、受け止めたいと思う。「問うこと・聴くこと」は祈りそのものである。祈りの中で神に「問い」、神に「聴く」だけでなく、互いに「問い」、互いに「聴く」ことによって教会はより豊かになるのではないだろうか。自分自身に対しては、もっと謙虚になり、他者に対してはより信頼することが今、求められている。小教区の委員会も、司祭の「取り巻き」としてではなく、信徒一人ひとりの、また、社会の声を代弁するものとなれば、教会はもっと素晴らしいものになる。

(福岡教区司祭)